

Title	「筆端鼓舞」という評価 : 抄物を通して見た文藝批評序説
Author(s)	蔦, 清行
Citation	日本語・日本文化. 2022, 49, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87448
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究論文〉

「筆端鼓舞」という評価： 抄物を通して見た文藝批評序説

蔦 清行

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

抄物の中世後期の言語・文化の資料として重要である。ただ従来は、主に日本語の歴史的研究の資料として用いられることが多く、文化研究に用いられることは盛んではなかった。本稿は、その抄物を用いて、中世の五山禅僧たちの文藝に対する評価という文化的問題を明らかにする試みである。

中世の五山禅僧たちの作った漢詩文については、既に多くの研究がある。その中で、どのような詩が模範とされたかという研究も進んでいる。本稿の筆者は、抄物を利用することで、その研究がさらに精緻に進展する可能性があると考ええる。抄物は注釈書であるから、たとえば特定の詩文の抄物であれば、注釈対象となるテキストのどの部分が、なぜ、どのように優れているのかということに、具体的に言及されるからである。彼らの文藝的好尚を伝える文献は他にいくらかもあるだろうが、その具体性という点で、抄物を上回る資料は稀ではないかと思う。

いくつかの実例を示そう。たとえば次のように詩文を評価し、あるいは批判する部分は、抄物中枚挙に暇がない。

- (1) 松風が出澗ゾ。十里ノ外へ、キコユルゾ。コヽガ鍛錬シタ処ゾ。(『黄氏口義』巻一本 15 才。「古詩二首上蘇子瞻」の二、「青松出澗壑、十里聞風聲」の句に対する注) (松風が谷川を出るのである。その風音が十里の向こうまで聞こえるのである。ここが「鍛錬」したところである)
- (2) 詩ハ風流ニミタガ面白ヲ、義理ダテホドニ鄭玄ガ義ハ面白モナイ、毛ニヲ

トツタ…（『毛詩抄』巻十一、21ウ。「斯干」詩の「乃生男子、載寢之床、載衣之裳、載弄之璋」句に対する注）（詩は風流の心で見るのが「面白い」が、理屈を立てて見るので鄭玄の解釈は「面白くない」、毛氏の伝に劣る）

- (3) 蕭¹⁾云、忽字、昔ハ^{タチマチ}忽トヨム也。村庵²⁾ハ、忽トシテ而³⁾トヨム、妙也。（『山谷幻雲抄』巻一49ウ。「平陰張澄居士隱処三詩・仁亭」詩の「奇羸忽諧偶、老大嘗艱難」に対する注）（蕭庵の説によると、「忽」字は、昔は「タチマチ」と訓んでいた。村庵は「忽トシテ」と訓むのが、「妙」である⁴⁾）

詞句の評価に用いる表現は、上のように「鍛錬」「面白い」「妙」など様々あるが、本稿で注目したいのは、次の例に見られる「筆端鼓舞⁵⁾」という語である。

- (4) 刻⁶⁾云、松無出澗之義。但詩人、筆端鼓舞之勢而已。（『山谷幻雲抄』巻一09ウ。「古詩二首上蘇子瞻」の二、「青松出澗壑、十里聞風聲」の句に対する注）（刻楮子の説によると、「松」には谷川を出るといような意味はない。ただ、詩人（黄山谷）の「筆端鼓舞」の勢いだけである）

本稿は、この語が抄物において文章の批評に用いられるときの意味を研究することによって、五山禅僧たちが文藝的表現のどのような点を重視して評価していたか、その一端を明らかにすることを目的とするものである。

1.2. 先行研究

この語についての先行研究としては、小西（1960ab）が挙げられる。小西の論文は、全体としては、『莊子』の「寓言」の考え方が中世から近世の文藝史、特に俳諧の世界に、どのように影響しているかを論じたものである。その中で、特に林希逸注の「寓言」が、「天地人の「実理」を説く」ものであって、そのために「思いきつた語の扱ひかた」や「異様な言いまわしで強く印象づけようとする表現方法」をとるとい構造を持ち、そのような表現方法こそが「鼓舞」であると論じている⁷⁾。

本稿はそれを受けて、その「異様な言いまわし」あるいは「思いきつた語の扱

びかた」とされる「鼓舞」が、具体的にはどのようなものであるのかを、実際の文章に即して明らかにしていく。

2. 「筆端鼓舞」の由来

「鼓舞」の由来については、1.2 節に記したように、五山禅僧たちの創意ではなく、『莊子』の、特に林希逸注に求められることが、小西 (1960ab) によって既に指摘されている。本稿はその理解に完全に同意するが、もう一つ、その推論を補強する事実を報告し、中世後期当時においてこの語がどのように理解されていたかについて、確認しておく。

まず注目すべきは、抄物においては単に「鼓舞」というのではなく、「筆端鼓舞」のような熟語で出てくることが多いという事実である⁸⁾。「筆端」も「鼓舞」も、もちろん多数用いられる語だが、「筆端鼓舞」となると漢籍でも用例が少ないのである。漢籍の活字本の本文データベース『中華經典古籍庫』を用い、「筆端鼓舞」を検索すると、11 件がヒットする⁹⁾。そしてそのうち 8 例までが、林希逸の『莊子麴齋口義』に由来する¹⁰⁾ ものであることが注目される。このうち一例を紹介する。

- (5) 又其筆端鼓舞變化、皆不可以尋常文字蹊徑求之、四難也。(『莊子麴齋口義』「発題」 p.1) (またその「筆端鼓舞」変化が、どれも通常の文章を理解する行き方で理解できないことが、四つめの難点である)

五山禅僧たちの抄物や詩文に見られる「鼓舞」の例の多くが「筆端鼓舞」という熟語であり、それが『莊子麴齋口義』に特有の言い方であることは、「鼓舞」が林希逸の用語に学んだものであるという小西 (1960ab) の推定を、より強固なものにするであろう。

既に指摘されていることであるが、希逸の『莊子麴齋口義』は、南北朝期に五山版が出版されており¹¹⁾、清原宣賢抄『莊子抄』には、

- (6) 此書ハ希逸注ニテハモトヨム人希也。惟肖¹²⁾ 講之、後ニ雲頂一華¹³⁾ ヨメ

り。其ヲ繼テ万里¹⁴⁾ ナドモヨメリ。怱一華¹⁵⁾ ノ説ニ、莊老列ノ三部ヲ希逸ガ注スルガ、コレヲ三足ノ鼎ニタトヘテ、麤齋トツクカト云ゾ。(『莊子抄』巻一、1オ) (この書『莊子』は、林希逸の注で読む人は、以前は稀であった。惟肖得巖が希逸注で講じてから、雲頂一華も同様に読むようになった。それを受け継いで、万里集九なども希逸注で読んでいる。一華建怱の説に、希逸が莊子・老子・列子の三部を注したので、それを三足の鼎に喩えて、「麤齋」(希逸の号。「麤」は鼎の意)と号をつけたかということである)

とあって、希逸注が惟肖得巖のころから読まれ出したことが知られている¹⁶⁾。その広がりには、たとえば万里集九による黄山谷詩の抄物『帳中香』において、「演雅」詩「五技鼯鼠笑鳩拙、百足馬蚊隣鼯跛」句に対して、『莊子』秋水篇を引用して注した後に、次のように林注が引かれることから、推して知ることができる¹⁷⁾。

- (7) 林希逸注云、夔無角、一足而行、見山海經。蚊、百足虫也。蛇、無足者也。自一足説到無足、皆言天機自然之動。(『帳中香』巻一之下21オ)

莊子と直接的な関係のない山谷詩の注釈にまで希逸注が利用されていることは、それがこの時代の文化人たちの共通の教養に位置していたことを示唆するだろう。その希逸の注に触れる中で、この「筆端鼓舞」という表現も浸透していったのではないか。そう考えてよければ、その「鼓舞」の理解については、清原宣賢抄『莊子抄』にある次の例が大いに参考になる。

- (8) (本文「夫道未始有封、言未始有常、為是而有畛也。請言其畛：有左、有右、有倫、有義、有分、有弁、有競、有争、此之謂八徳。」(巻一、内篇齊物論第二)、林注「且倫字、義字、分字、弁字、競字、争字、本無甚分別、如何名以八徳。看得他文字破、不被他鼓舞処籠罩了、方是読得莊子好、雖是莊子復生、亦必道還汝具一隻眼」)

名以八徳一イハバ凶徳デアランゾ。徳ト云ホドニヨイトバカリ心得テハワ

ルカラン。鼓舞ハ文章ノ波瀾^ゾ。鼓舞シテハヤシタテタヤウナ処^ゾ。籠ハ鳥ノコ^ゾ。罩^{テウ}ハカゴノ中へ魚介ヒンマワイテヲシコメテヲク^ゾ。鈍ナ者ハカゴノ中へハイル^ゾ。莊子ノ文章ノ鼓舞スル処ニヲホワレズハ、莊子ヲ読得テヨカラント也。(『莊子抄』巻一 46 ウ～47 オ) (「名以八徳」の句の「徳」は、いわば凶の徳であるだろう。徳と言うから良いと決めつけては悪いだろう。「鼓舞」は「文章の波瀾」である。鼓を打ち舞いを舞って囃し立てるようなところである。「籠」は鳥の籠である。「罩」は籠の中へ魚類を引っ張って振り回して押し込めておくことである。鈍い者は籠の中へ入ってしまう。莊子の文章の「鼓舞」するところに振り回されないならば、莊子を読むことができて、よろしいということである)

希逸の「鼓舞」に対する直接の言及という点で貴重であるが、そこに「文章ノ波瀾^ゾ」とあるのが重要である。「波瀾」は『日本国語大辞典』(「はらん」の項目)に「文章に、起伏や変化があること。また、詩文などの一段と精彩がある部分」と解説される語である¹⁸⁾。宣賢のこの記述は、小西(1960ab)の言う、「思いきつた語の扱ひかた」や「異様な言いまわしで強く印象づけようとする表現方法」という「鼓舞」の理解¹⁹⁾が、当時の禅僧たちとごく近い交わりを持っていた博士家の大学者と略同様であったことを示唆するのである。

3. 「筆端鼓舞」

3.1. 抄物の例

以上見てきたような「筆端鼓舞」の理解を踏まえた上で、抄物の例を見ていこう。抄物の読解は原典の理解と並行して進めていかねばならないため、個々の例の解釈について、あるいは煩雑に思われるかもしれない。できるだけ丁寧に論を進めていくためということで、ご了解願いたい。

3.1.1. 『山谷幻雲抄』、「送王郎」

最初に挙げるのは、『山谷幻雲抄』の巻一、「送王郎」詩の抄文の中に見られるものである。

- (9) 幻謂²⁰⁾ 酒云、菊云、墨云、貼前篇用之字。歌字不然。蓋送君以陽関墮淚之声之一句、無可貼之字。故別歌字可謂筆勢鼓舞。(『山谷幻雲抄』卷一 61 オ・ウ)

注釈対象となる原典『山谷詩集注』の詞句を、少し長めに引用して示す。引用中の下線部が直接の注釈対象であるが、それより前の部分も抄文の理解に密接にかかわるためである。

- (10) 酌君以蒲城桑落之酒、泛君以湘纍秋菊之英。贈君以黟川点漆之墨、送君以陽関墮淚之声。酒澆胸次之磊隗、菊制短世之頽齡。墨以伝万古文章之印、歌以写一家兄弟之情。…²¹⁾ (『山谷詩集注』卷一 23 ウ～24 ウ)

(9) の抄文の言わんとするところは、「幻雲の説によれば、「酒澆胸次之磊隗」と、前に「酌君以蒲城桑落之酒」とあった「酒」の字を用い、「菊制短世之頽齡」と、前に「泛君以湘纍秋菊之英」とあった「菊」の字を用い、「墨以伝万古文章之印」と、前に「贈君以黟川点漆之墨」とあった「墨」の字を用いている。それに対して、「歌以写一家兄弟之情」の「歌」の字だけは、前にあった字ではない。おそらく、対応する「送君以陽関墮淚之声」の句には、使える文字がなかったのだろう。だから「歌」の字だけは、「筆勢鼓舞」と言うべきである」ということである。

ここでの「筆勢鼓舞」の意味するところは、「送君以陽関墮淚之声」句から一文字を選び取ってもう一度使うという、そこまでの文脈から当然予想される語の使用を、敢えて避けている²²⁾ということであろう。

本稿の主張をここで先取りして言えば、抄物における批評の語としての「筆勢鼓舞」は、上の例に見るような、対となる文脈からの予定調和を破る表現を言うものであるように思われるのである。

3.1.2.『古文真宝彦龍抄』、蘇軾「後赤壁賦」

次の例を見てみよう。(11) が原典（下線部が直接の注釈対象）、(12) がそれに対する注釈である。

- (11) 適有孤鶴、橫江東來。翅如車輪、玄裳縞衣、戛然長鳴、掠予舟而西也。
須臾客去、予亦就睡。夢一道士。羽衣翩躚、過臨臯之下、揖予而言曰、
赤壁之遊樂乎。²³⁾ (『古文真宝』後集卷一、蘇軾「後赤壁賦」)
- (12) 客モインダホドニ、予モ睡タレバ、道士ヲ夢ニ見タゾ。前ニ鶴ヲ云処ニハ玄一縞一ト人ノ様ニ云イ、道士ヲ云処ニハ羽一翩一ト鶴ノ様ニ云タ。真ニ文章鼓舞処ヂヤ。(『古文真宝彦龍抄』25オ)

「客モインダホドニ、予モ睡タレバ、道士ヲ夢ニ見タゾ」は、「客も去ってしまったので、私も眠ったところ、道士を夢に見た」ということ。「前ニ鶴ヲ云処ニハ玄一縞一ト人ノ様ニ云イ、道士ヲ云処ニハ羽一翩一ト鶴ノ様ニ云タ」は、「前に鶴を描いた部分（適有孤鶴、橫江東來。翅如車輪、玄裳縞衣、戛然長鳴、掠予舟而西也）では「玄裳縞衣」と人のように表現し、道士を描くところ（夢一道士。羽衣翩躚）では「羽衣翩躚」と鶴のように表現した」ということである。

ここでの「鼓舞」も、先の『山谷幻雲抄』の例と同様に考えてよいであろう。すなわち(11)では、「孤鶴」に対して「裳」「衣」という衣服の形容を用い、人に擬して扱う一方で、人である「道士」には「羽」「翩」という鳥に対するような形容を用いている。ここでも通常予想されるのとは逆の表現がなされており、その妙味を評して、「文章鼓舞」のところだと言っているのである。またここで「真ニ」というところからは、それがプラスの評価であること、そのような表現を文藝的に高く評価していることも看取されよう。

3.1.3.『古文真宝彦龍抄』、韓愈「獲麟解」

さらにもう一つの例、同じく『古文真宝』後集の巻二、韓愈「獲麟解」において、麟²⁴⁾についての説明に、

- (13) 非若馬牛・犬豕・豺狼・麋鹿然。(中略) 角者吾知其為牛。鬣者吾知其為馬。犬豕・豺狼・麋鹿、吾知其為犬豕・豺狼・麋鹿。惟麟也不可。25)
 (『古文真宝』後集卷二、韓愈「獲麟解」)

とあるところ、『古文真宝彦龍抄』の抄文は次のように解説する（(13)の下線部が直接の注釈対象である）。

- (14) 先ツ牛ヲ云ハ、前ニ馬牛一ト書ホドニ馬カラ書^{カハフ}ズヲ、先牛ヲ云。此ガ筆端鼓舞ト云也。人ノ方ヘ送序ヤナンドニ二人ノ方ヘ一度ニ書ニ、如此前ニ先書タラン人ヲバ^{ヨク}後ニハ^{ノチ}後ニカク、此ガ文ノ法也。(『古文真宝彦龍抄』、34オ)

前半は「角者吾知其為牛」と牛のことを先に言い、「鬣者吾知其為馬」と馬のことを後に言うのは、前に「非若馬牛」と書いてあるので馬から言うのが適当なようだが、ここでは先に牛について言っている。これが「筆端鼓舞」ということである」ということ。この例も、前にある文句から当然予想される順序を取えて逆にすることを「筆端鼓舞」と言っているものである。後半は、その例として、「ある人の方へ手紙を送るついでに、別のもう一人あての手紙もその中に一度に書くことがあるが、このように最初には先に書いた人のことを、次に出てきたときには後に書く。これが作文のきまりである」と言っているが、言葉の順序を逆にすることが重要とされていたことが、このたとえからも読み取れるであろう。

3.1.4. 笑雲清三抄『古文真宝抄』、蘇軾「後赤壁賦」

最後にもう一例、笑雲清三抄『古文真宝抄』からの例を挙げる。(15)が原文(下線部が直接の注釈対象)、(16)がそれに対して附された抄である。

- (15) 是歲十月之望、歩自雪堂、將歸于臨臯。²⁶⁾ (『古文真宝』後集卷一、蘇軾「後赤壁賦」)
 (16) 松云²⁷⁾、九万里²⁸⁾云、是歲即元豐五年也。望即十五日也。前賦ニ壬戌

ト支干ヲ書、爰ニハ是歳ト書、是筆端之鼓舞也。(笑雲清三抄『古文真宝抄』卷一ノ二78才)

この抄文の意味は「青松の説によると、万里集九が言うには、今年というのはつまり元豊五年のことである。「望」というのは十五日のことである。前の賦では「壬戌」と干支を書いているのに対し、ここでは「是歳」と書いている。これが「筆端の鼓舞」である」ということ。ここで「前賦」というのは、『古文真宝』後集でこの「後赤壁賦」の直前に収載されている「赤壁賦」（いわゆる「前赤壁賦」）のことを指す。「前赤壁賦」の冒頭は

(17) 壬戌之秋、七月既望、蘇子与客泛舟、遊於赤壁之下。²⁹⁾ (『古文真宝』後集卷一、蘇軾「赤壁賦」)

と始まるのであるが、ここで「壬戌之秋」と干支をいうのに対し、後賦は「是歳十月」とだけあって干支を示さないことを、「筆端之鼓舞」と表現しているのである。前賦と後賦で、同じ対象を指すのに敢えて言葉を変えていることを言っているのであって、これまでの例と同様、対になる文章から予想される言葉と異なる表現を敢えてすることをいう評語と見ることができよう。

3.1.5. 抄物の例小括

以上見てきた抄物の「筆端鼓舞」の諸例はいずれも、対になる物事を表す際に、前の文脈から予想されるのとは異なる表現をとることを言う、と帰納されるように思われる。小西(1960a: 103)は「思いきつた語の扱ひかたや置きぐあいで文章が生きいきとしてくる点」「異様な言いまわしで強く印象づけようとする表現方法」が「鼓舞」であるとし、それは総論的には大いに首肯される。ただ五山禅僧たちがそのような表現方法の典型として見ていたのは、本節で挙げてきたように、もっと限定的な、前の文脈からの予定調和を破るような表現だったのでないかと思われるのである³⁰⁾。

3.2. 抄物以外の例

なお「筆端鼓舞」は、何も抄物にのみ現れる表現というわけではなく、文章を批評する場面であれば、当時の資料に散見する。たとえば万里集九『梅花無尽蔵』巻六(44)「画山水巻軸洛下諸老詩文之跋（序文横川所筆也）」には、横川景三³¹⁾の文章を評する語として用いられている。

- (18) 絵の千岩万壑に誇れる、詩の五湖三江を呑むや、斯の一軸に集大成す。中ん就く、横川師の筆端の鼓舞は、越の後州の山川草木の光輝、旧時に万倍す。³²⁾（多くの岩や谷を誇らかに描いた、この絵や、中国の三江五湖の天地をも呑みこむほどの、すばらしいこの詩を、この巻き物は集めて大成しています。とりわけ、横川景三師が序文に筆を振るった励ましの文章は、これによって、この絵に描かれた越後の国の山や川、草木の輝きを、以前に万倍にもしました）

とある。また同じく『梅花無尽蔵』巻七(4)「東坡先生画賛（玉潤岷江心需之）」では、蘇東坡の文筆の形容として、次のようにいう。

- (19) 文章活動すれば、波瀾湧き、星斗浮ぶがごとし。七字、六字、五字、四字、三字の故実を鍊る。仁宗、英宗、神宗、哲宗、徽宗の廟謀に関する。具さに筆端を鼓舞し、郭象注の莊子を睥睨し、褒貶を句裡に提す。³³⁾（詩文に力を入れ、七字、六字、五字、四字、（三字）で表わされる故実を練りきたえ、また、北宋の仁宗、英宗、神宗、哲宗、徽宗の五朝の朝廷の謀に参画した。政治のみならず、学問にも活躍し、筆を勢よく振って、郭象注の莊子をにらんで、その注「蘇子瞻広成解」を作り、その文句の中に郭象注のよしあしを示している）

市木武雄『梅花無尽蔵注釈』では、(18)の例の語釈において、「筆端」については「筆先。文章に書かれた事」といい、「鼓舞」について「鼓によって舞わず。励ますこと」とする。ちなみに『時代別国語大辞典室町時代篇』では、「鼓舞」について「内にある意気や氣力をふるい立たせて、いきいきと活動させること」といい、古典中国語の辞書、たとえば『漢語大詞典』には、「激発；激励」

とあって、『漢書』楊雄伝の「鼓舞万物者、雷風乎。鼓舞万民者、号令乎」という例を挙げている (vol.8-p.1394)。

もちろん、そのような理解でも大きな問題は生じない。しかしここまで論じてきたことから考えると、これらの例も、読者の予想を裏切るような大胆な文章表現というような意味で理解するのが良いのではないかと思う³⁴⁾。これは、抄物の例として挙げた

- (4) 刻云、松無出澗之義。但詩人、筆端鼓舞之勢而已。(『山谷幻雲抄』卷一 09ウ。「古詩二首上蘇子瞻」の二、「青松出澗壑、十里聞風聲」の句に対する注)

でも同様で、この例では特に文脈からの予想に反する言葉の使い方ということはないと思うが、何らかの意味で意外な言い回しであることを言うのが、この「筆端鼓舞」なのではないだろうか。

4. 結論と展望

本稿は、抄物に見られる「筆端鼓舞」という表現について、それが具体的にどのようなことをいう評価の語であるのか、考えてきた。結論をまとめて言えば、抄物に見られた評価の語としての「鼓舞」の語は、その源をたどれば、林希逸『莊子膚齋口義』を通じて禅僧の文藝界に取り入れられたものであった。その語は、文章に起伏や変化のあることの謂いであって、より具体的には、対となる文脈から予定調和的に想起される文言を避け、あえてそれを破るような表現を志向することであった。五山の文藝ではそのような表現が愛好された³⁵⁾、ということになる。

以上の結論は、小西(1960ab)の研究から当然に予想されることかもしれない。ただ本稿は、小西があまり詳しく論じていない、中世五山禅僧たちの「鼓舞」理解がどのようなものであったかという点について、抄物における具体的な言語表現に基づき、個別のテキストにおいて実証的に示してきた。その点において、小西の研究成果をさらに進展させることができたのではないかと思う。

そしてその成果は、本稿の副題に掲げる「抄物を通して見た文藝批評」ということにつながる。この副題の意味は、当時の文藝を同時代人がどのような観点で評価し、あるいは享受していたかということ、抄物の中に見られる意見表明を通して見るということであり、本稿はその序説と位置づけられる。抄物の語ることに忠実に耳を傾け、当時の人々の文藝的好尚の一端を明らかにし得た点に、学問的価値を主張したい。

ただそれは、抄物からそういう価値観が読み取れるというだけのことである。これまでのいわゆる五山文学研究における成果、あるいはより広く、歌学のような当時の文藝理論の研究の成果とそれがどうつながるか、現時点では分からない。不勉強ゆえのことで、まことに慚愧の極みと言うほかない。伏して諸賢のご教示を乞う次第である。

〈注〉

- 1) 正宗竜統（1428～1498、別号蕭庵）の説であることを標示する。なお、本稿で示す明治時代以前の西暦（グレゴリオ暦）は、便宜的な目安であり、和暦から厳密に換算したものではない。
- 2) 希世霊彦（1403～1488、別号村庵）の説であることを標示する。
- 3) 「忽」は、音読みするものであろう。同じく山谷の詩の抄物である『黄氏口義』では、この詞句に対して『幻雲抄』と同じ抄文を有するが、そこでは音読を指示する右傍線が附されている。また「トシテ」は、おそらくはもと訓点で、右傍に小書きされるべきものと推測される。
- 4) なおこの例では、点の付け方、すなわち解釈の仕方によって、一方の解釈が面白いと評価されている。同じテキストが、読み方によって価値が変わるというのは、現代的な批評にもつながる考え方であり、興味を惹かれるが、ここでは事実の指摘に留める。もっとも、注釈書という媒体において、解釈を一つに特定せずどちらで読んでもよい、とするのは、現代の注釈に対する考え方からすると奇妙に思われるかもしれない。しかしこれは抄物にはよくあることなのである。たとえば(2)「詩ハ風流ニミタガ面白ヲ、義理ダテホドニ鄭玄ガ義ハ面白モナイ、毛ニヲトツタ…」も中国での注の付け方、解釈の仕方が面白さと関連するという指摘であって、どちらか一方が「正しい」解釈であるとするわけではない。またたとえば黄山谷「詠史呈徐仲車」詩の「杜微対諸葛、興致但求去」句に対する『山谷幻雲抄』の注（巻一21ウ）には、「蕭云、興致ハ杜微

ヲ賞翫スレドモ、只求去也、但字ハタバシノ心モアリ、唯字ノ心モアル也、両无害也」とある。二つの意味があるが、どちらをとっても無害、すなわちどちらでも構わないとするのである。このような注釈書における態度も、今後研究すべき重要な課題であるように思われる。

- 5) 「筆勢鼓舞」「文章鼓舞」あるいは単に「鼓舞」という形で現れることもあるが、以下、この表現に言及するときには、「筆端鼓舞」または単に「鼓舞」で代表させる。
- 6) 瑞溪周鳳 (1391～1473。別号刻楮子) の説であることを表す。
- 7) 小西 (1960a : 103-105)。なお、小西の論文はあくまで「寓言」説と俳諧におけるその受容が主たる研究対象であるため、禅僧たちの「鼓舞」の理解については、詳しくは触れられていない。本稿は彼らの残した抄物に注目し、小西が辿った『莊子』林注から談林俳諧、そして蕉風俳諧へと続く「鼓舞」受容の流れに、新たな着眼点を提供する試みとも位置づけられるであろう。本稿と小西の論との相違については、第4節でも触れる。
- 8) 1.1 節に挙げた (4) (但詩人、筆端鼓舞之勢而已) の例、および3節の諸例を参照されたい。
- 9) なお、「筆勢鼓舞」「文章鼓舞」はともにこのデータベースでは用例がない。この文字列でヒットしないだけで、組み合わせ方を工夫すればいくらかは見つかるかもしれないが、ここでは以下に述べるように『莊子麴齋口義』に「筆端鼓舞」の用例があり、それを五山禅僧たちが学んでいたということを重視したい。
- 10) データベース内で、他の典籍が『莊子麴齋口義』を引用している場合を含むため、「由来する」という表現をとった。
- 11) 川瀬 (1970 : 204) による。なお、『莊子』のほかにも、『列子』の林希逸注『列子麴齋口義』も、南北朝前に元版の覆刻が刊行されている。
- 12) 惟肖得巖 (1360～1437)。室町中期の禅僧。当時の五山文化圏の中心人物の一人であった。
- 13) 一華建惣 (いっかけんぶ) (?～?) は室町時代中期～後期の禅僧。南禅寺第百九十一世。瑞溪周鳳 (注6) を参照) と親しく、彼の日記『臥雲日件録』にしばしば登場する。「雲頂」は、一華がある時期相国寺雲頂院の塔主であったために、このように言われるのであろう。
- 14) 万里集九 (1428～1503 ごろ) は室町時代中～後期の学僧。蘇東坡詩についての『天下白』、黄山谷詩についての『帳中香』など、漢文体の抄物を多く残しており、また詩文集に『梅花無尽蔵』がある。
- 15) 注13) を参照。
- 16) 芳賀 (1956:199-208)、また土井洋一 (1992 : 150) を参照。
- 17) これはあくまで一例で、林希逸注の利用は同抄には枚挙に暇がない。さらに『山谷幻雲抄』や『黄氏口義』など他の山谷の抄物にも、林注の利用は容易に見出すことができる。たとえば松本・石丸 (2019:34) の注330を参照されたい。

- 18) ちなみに月舟寿桂の文集『幻雲稿』「河清西堂住建仁道旧」（道旧は「道旧疏」のことで、「禅宗で新任持が入寺する時に、法友がそれを推奨する趣旨を述べる疏」（日本国語大辞典）には、「東坡の波瀾、山谷の鍛錬」という文言がある（「左氏浮夸、春秋謹嚴、孰探其蹟。東坡波瀾、山谷鍛錬、独執其中」 p.148）。本稿第 1.1 節で、評価の語としての「鍛錬」の例（1）を挙げたが、東坡・山谷の二人が、このように、ともに評価されつつもその評価の表現が異なることは、注目されてよいと思う。
- さらにちなみに、山谷詩集の巻 19、「晚泊長沙示秦處度」詩の其四、「秦范波瀾闊、笑陸潘潘江」句に一韓智翹が附したとされる抄に「二子ハ文章ヲクハツクハツト書イテ、文章ノ波瀾ガヒロイゾ。陸潘ガ文ヲ江ヤ海ニタトヘタガ、其モ此子ノ前デハヲカシイ事ゾ」（『山谷抄』巻六 28 ウ）とある。「波瀾ガヒロイゾ」は「波瀾闊」を訓読したものであろうが、「波瀾」を「ヒロイ」と形容するところ、『日本国語大辞典』に「起伏や変化」とあったのとはやや趣を異にするとも見られる。ここでは事実の指摘に留めるが、なお研究が必要であろう。
- 19) ただし、小西（1960a：103-104）が「鼓舞」を解説するのに引くのは、毛利貞斎『莊子口義大成俚諺鈔』「鼓舞一トハ、此句ハ筆端ノ微妙ナルコトヲ称美シテ云。（中略）鼓ツツミウチ舞フコトヲナシ、囀ハヤシタテ起テ、人ヲ慰ナグサメヨロコ悦ヨロコバスルガ如クニ、所説ノ辞ヲ、一樣ニ不云シテ、…（以下略）」（首巻 03 ウ）など江戸時代に入ってから資料（初版は元禄 16（1703）年）である。小西の目的にとってはそれが穏当であるが、室町時代の理解を反映する資料としては『莊子抄』を重視すべきであろう。
- 20) 「幻謂」は、以下の説が幻雲すなわち月舟寿桂（1470-1533）によるものであることを標示するもの。
- 21) 書き下し文「君に酌むに蒲城桑落の酒を以てし、君に泛ぶるに湘隴秋菊の英を以てす。君に贈るに黟川点漆の墨を以てし、君に送るに陽関墮涙の声を以てす。酒は胸次の磊隗たるを澆き、菊は短世の頽齡を制す。墨は以て万古文章の印を伝へ、歌は以て一家兄弟の情を写す。…」
- 本稿では原則として漢詩文の引用は書き下し文で行っているが、ここから数例は抄文と原典とを比較しながら見ていく必要があるため、原典を引用している。
- 22) この部分については、「送君以陽関墮涙之声」の「声」を「歌以写一家兄弟之情」の「歌」で言い換えて受けていると解釈することもできる。ただしその場合も、これまでの三句の「酒」・「菊」・「墨」から当然予想される表現「声」を敢えて裏切っている、という点は同様である。
- 23) 『新釈漢文大系』による書き下しと通釈を示す。「^{たまたま}適 孤鶴有り、江を横ぎりて東より来る。翅車輪の如く、玄裳縞衣、戛然として長鳴し、予が舟を掠めて西せり。須臾にして客去り、予も亦睡に就く。一道士を夢む。羽衣翩躚として、臨臯の下を過ぎて、予に揖して言ひて曰く、赤壁の遊樂しきかと」（ちょうどその時、ただ一羽の鶴が長江を横切つて東から来た。その翅はねは車の輪のように大きく強く、黒い羽先は黒のもすそ、

白い体は白ぎぬの上衣、道士の服装に似ていて、硬い物を打った音のような鋭い声で長鳴いて、私の舟をすれすれに飛んで西の方に去って行った。しばらくして客も去り、私もまた眠りに就いたが、一人の道教の仙術を学ぶ者が、鳥の羽の衣を着てひらひらと飛びまわり、臨臯亭の下を通り、手を胸にあげて私に会釈をして言った、「赤壁の遊びは楽しかったか。」と)

- 24) 麒麟のこと。伝説上の神獣で、聖人が皇帝の位にあって善い政治が行われているときに世に出るといふ。
- 25) 『新釈漢文大系』による書き下しと通釈は、「馬牛・犬豕・豺狼・麋鹿の若く然るに非ず。(中略)角ある者は吾其の牛たるを知る。鬣ある者は吾其の馬たるを知る。犬豕・豺狼・麋鹿は、吾其の犬豕・豺狼・麋鹿たることを知る。惟麟や知る可からざるなり」(馬・牛・犬・豚・山犬・おおかみ・おおじか・やまじかななどのような目慣れた形ではない。(中略)角のある者は、私はそれが牛であることを知る。たてがみのある者は、私はそれが馬であることを知る。犬や豕いのこ(豚)、山犬やおおかみ、大鹿や山鹿など見なれたものは、私はそれがそういう動物であることを見知っている。ところが、ただ麟だけはそれを知ることができない)。
- 26) 『新釈漢文大系』による書き下しと通釈「是歳十月の望、雪堂より歩して、將に臨臯に帰らんとす」(ことし十月の十五夜に、私は雪堂から歩いて、臨臯亭に帰ろうとした)。
- 27) 「松云」は青松(桂林徳昌(1428～1509?))の説であることを表す。卷一之一の冒頭に、「松 前建仁青松和尚諱徳昌字桂林」とある。
- 28) 「九万里」は万里集九のこと。注14)を参照。
- 29) 『新釈漢文大系』による書き下しと通釈「壬戌の秋、七月既望、蘇子客と舟を泛べて、赤壁の下に遊ぶ」(壬戌、元豊五年の秋七月十六日の夜、われ蘇子は客と共に、舟を浮べて赤壁の岸の下に遊んだ)。
- 30) 小西(1960a: 104)は「しかも、その「鼓舞」は、普通なら「唯大人則易之」と言うところを、わざわざ「其易也其唯大人乎」のように変ったシンタックスで表現することまで含む」とも述べている。ただ『莊子』林注自体は確かにそう読めるのであるが、少なくとも五山禅僧たちの「鼓舞」理解は、本稿のように解しておくのが穏当であるように思う。
- 31) 横川景三(1429～1493)は、いわゆる五山文学の中期を代表する文筆僧。著作に『小補集』『補庵集』『小補東遊集』『補庵京華集』などがある。
- 32) 原文は漢文で、「絵之誇千岩万壑也。詩之吞五湖三江也。斯一軸集大成。就中、横川師、筆端之鼓舞。越之後州山川草木之光輝。万倍旧時」。
- 33) 原文は漢文。「文章活動。波瀾湧(而脱歟)、星斗浮。鍊七字六字五字四字三字之故実。関仁宗英宗神宗徽宗之廟謀。具鼓舞於筆端。睥睨郭象注莊子」。
- 34) 芳賀(1956:206-207)は、「林希逸の莊子麴斎口義によつて莊子を研究した禅僧」の一人として万里集九を挙げており、実際に万里の詩文集『梅花無尽蔵』の中にも、その

確実な徴証を見出すことができる（芳賀（1956：204-205））。それを踏まえると、(18) (19)の「筆端鼓舞」も、希逸特有の使い方を踏まえたものと考えるのが妥当であるように思われる。

- 35) もっとも、あまり度が過ぎてもよくなかったようで、『実隆公記』永正十二年正月八日条に月舟寿桂の談として「山谷波瀾過タリ、杜子美ハ如大海、希ニ波瀾アリ、仍其味深云々」という言葉のあったことが記されている。何事も中庸が重要であったということであろう。なお、これは「波瀾」に関する評価であるが、第2節例(8)に「鼓舞ハ文章ノ波瀾ゾ」とあったことを想起されたい。

〈引用文献〉

本稿で引用した文献は次の通り。引用にあたっては、読解の便を考慮し、適宜濁点・句読点を加えた。漢字の字体は通行のものに改めた。割注・小書きは〈〉で括弧して示した。原文の漢文には訓点が施されている場合があるが、引用にあたってはこれを省略した。書き下し文は特に注したものを除き、歴史的假名遣いを原則として私に作成した。

『幻雲稿』：『続群書類従』第十三輯上、文筆部巻342

『黄氏口義』：建仁寺両足院蔵本の調査による。なお、当該本は柳田（2004）では「林宗二抄山谷詩私抄」という書名で掲出されている。

『古文真宝彦龍抄』：大塚光信編『続抄物資料集成 第五巻 古文真宝桂林抄・古文真宝彦龍抄』清文堂出版、1980年

『古文真宝』後集：星川清孝『古文真宝（後集）』明治書院、1963年

笑雲清三抄『古文真宝抄』：市立米沢図書館蔵元和3年活字印本『笑雲和尚古文真宝之抄』（米沢善本140。市立米沢図書館デジタルライブラリーによる）

『実隆公記』：高橋隆三編『実隆公記』続群書類従完成会太洋社、1957～1967年（巻一上～巻六下は太洋社『実隆公記』（1931～1938）の再版。本稿では再版本を用いた）

『山谷幻雲抄』：『山谷詩抄』嘯岳鼎虎禪師自筆本：長州毛利洞春寺蔵洞春寺本（洞春寺、2006）をもとに、その親本に当たる両足院本との異同がある場合には適宜注記した。

『山谷詩集注』：早稲田大学図書館蔵五山版『山谷詩集注』（請求記号へ18 01286。早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる）

『山谷抄』：大塚光信編『続抄物資料集成 第六巻 山谷抄』清文堂出版、1980年

『荘子口義大成俚諺鈔』：早稲田大学図書館蔵享和3(1803)年整版本（元禄16(1703)年刊の求版本。請求記号ロ13 01041。早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる）

『荘子麴齋口義』：周啓成校注『荘子麴齋口義校注』中華書局、1997年

『荘子抄』：大塚光信編『続抄物資料集成 第七巻 荘子抄』清文堂出版、1981年

『帳中香』：国立国会図書館蔵古活字版『帳中香』（請求記号WA7-92。国立国会図書館デジ

タルコレクションによる)

『梅花無尽蔵』: 市木武雄『梅花無尽蔵注釈』続群書類従完成会、1993～1995年

『毛詩抄』: 岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成 第六巻 毛詩抄・蒙求抄』清文堂出版、1971年

〈参考文献〉

市木武雄『梅花無尽蔵注釈』続群書類従完成会、1993～1995年

川瀬一馬(1970)『五山版の研究』日本古書籍商協会

小西甚一(1960a)「芭蕉と寓言説(一)」『日本学士院紀要』18(2)、pp.97-118

小西甚一(1960b)「芭蕉と寓言説(二)」『日本学士院紀要』18(3)、pp.145-184

土井洋一(1992)「莊子抄について」大塚光信編『続抄物資料集成 第十巻 解説・索引』清文堂出版、pp.127-158

芳賀幸四郎(1956)『中世禅林の学問及び思想』日本学術振興会(思文閣出版より『芳賀幸四郎歴史論集3』として1981年に再版。本稿では再版本を用いた)

星川清孝(1963)『古文真宝(後集)』明治書院

松本朋子・石丸羽菜(2019)「建仁寺兩足院所蔵『黄氏口義』「演雅」翻刻と注釈」『国語国文』88-5、pp.1-44

柳田征司(2004)「抄物目録稿(原典漢籍集類の部)」『訓点語と訓点資料』113、pp.3-82

〈謝辞〉

貴重な資料の閲覧をご許可いただいた諸機関に、心より感謝申し上げます。

本研究はJSPS 科研費 JP20K00341、19K00356、JP18H00643 の助成を受けたものである。

An Evaluation Called "Hissei Kobu": An Introduction to the Study of Literary Criticism through the Shōmonos

TSUTA Kiyoyuki

In some shōmonos (commentaries written in kana on Chinese classic books), the annotators criticize the texts to be annotated. One of the words used in such critiques is “hissei kobu (brushstroke inspiration)”. The purpose of this paper is to clarify the meaning of this term.

A previous research has shown that this word originates from *Zhuangzi Juanzhai Kouyi*, a commentary on *the Zhuangzi* by Lin Xiyi. The meaning of the word is thought to be “a method of expression that attempts to make a strong impression through unusual wording”.

However, investigating the examples of usage in the shōmonos, the meaning is found to be more limited. The word is thought to mean a use of language contrary to the way which might be expected from the previous context. The Gozan Zen monks in the late middle ages loved such expressions in the literary writings.